

洪吟

日本語版

李洪志

目 次

その心志を苦しめる	1
人を做す	2
覚者	4
誰が敢えて常人の心を捨て去るか	5
願	6
無存	8
法輪大法	9
法に溶け込む	10
正法の船に乗る	11
無為	12
大法を学ぶ	13
圓明	14
正法の門を求む	15
法を得る	16
縁	17
了願	18
助法	19
因果	20
迷いの中で修める	21
着実に修める	22

佛法は圓容	23
再び済度	24
真修	25
同化して圓滿する	26
大法は迷いを破る	28
三界を跳び出る	29
懸空寺を訪れる	30
恒山を訪れる	31
分かたれて明らか	32
南華寺を訪れる	33
自ら修める	34
静観	35
洪	36
天地を主宰す	37
人と覚者の分別	38
人と妖怪との間	39
高き処寒さに堪えず	40
大覚	41
仕事と佛を修す	42
劫難の後	43
迷い	44
魔に変わる	46
道中	48

威徳	50
佛主	51
法輪世界	52
縁は聖果に帰す	54
響堂山寺に訪れる	55
泰山に登る	56
功成って圓滿	58
太極	59
苦度	60
変異	61
衆生を広く済度する	62
心明	63
難の中で乱れず	64
末法	65
執着を放下する	66
有為	67
岳飛廟に訪れる	68
故里を訪れる	70
清の東陵を訪れる	72
善悪は已に明白	73
日月潭を訪れる	74
長安を憶う	75
安心	76

振り返る	77
世界の十悪	78
雁門関を訪れる	80
同化	82
新生	83
笑う	84

その心志^{しんし}を苦しめる

圓滿^{ぶっか}となって佛果を得る

苦^なを嘗めるをもって樂とす

身^{ろう}を勞するを苦と算^{さん}せず

心を修するは最も過^すぎ難^{がた}し

関^{かん}という関は全て闖^こえるべし

いたる処^{ところ}すべて是れ魔^こ

百の苦一齊^{いつせい}に降る

其の如何^{い かん}に活^いくかを見る

世上^うの苦に堪え得れば

世^いを出ずれば是れ佛陀

一九七六年十二月十七日

苦其心志

圓滿得佛果 吃苦當成樂

勞身不算苦 修心最難過

關關都得闖 處處都是魔

百苦一齊降 看其如何活

吃得世上苦 出世是佛陀

一九七六年十二月十七日



人を^な做す

名の^な為の者、氣恨むこと終生^{しゅうせい}

利の^{ろくしん}為の者、六親^しを識らず

情の^{ぼんのう}為の者、自ら煩惱^{たず}を尋ね

苦しく相闘い、業を造ること一生

做人

為名者氣恨終生

為利者六親不識

為情者自尋煩惱

苦相鬥造業一生



名を求めざれば、悠悠自得^{ゆうゆうじとく}

利を重んぜざるは、仁義之士^{じんぎのし}

情に動かざれば、心清らかに欲寡^{すくな}し

身を善^よく修すれば、徳を積むこと一世^{いっせ}

一九八六年七月十三日

不求名悠悠自得

不重利仁義之士

不動情清心寡慾

善修身積徳一世

一九八六年七月十三日



覺 者

常人、我^{われ}を知らず
我、玄中^{げんちゅう}に在^ありて坐る
利慾^{りよく}の中に、我無く
百年^{のち}の後、我^{ひと}独り

一九八七年二月二日

注：私が法を伝え始める前、自ら独修していた時
に記したもの。

覺 者

常人不知我
我在玄中坐
利慾中無我
百年後獨我

一九八七年二月二日

註：在我沒有傳法之前自己獨修時所寫。



誰が敢えて常人の心を 捨て去るか

常人は只、神仙に倣^なることを想う

玄妙^{げんみょう}の後面^{こうめん}に、辛酸^{しんさん}有り

心を修め、欲を断ち、執着^さを去る

難の中に迷って、青天^{せいてん}を恨む

一九八八年八月九日

誰敢捨去常人心

常人只想做神仙

玄妙後面有心酸

修心斷慾去執著

迷在難中恨青天

一九八八年八月九日



願

ぼうぼう 天地、われ 小と見る
茫茫たる

こうかん そうきゅう こ な
浩瀚たる 蒼穹、是れ誰が造す

願

茫茫天地我看小

浩瀚蒼穹是誰造



けんこん
乾坤の外、更に垠無し

こうがん
洪願の為に、大道を伝う

一九九〇年一月一日

乾坤之外更無垠
為了洪願傳大道

一九九零年一月一日



む ぞん
無 存

生きて求めるもの無く

死しても惜おしまず

もうねん とうじん
妄念を蕩尽すれば

佛を修するは、難しからず

一九九一年十月二十日

無 存

生無所求

死不惜留

蕩盡妄念

佛不難修

一九九一年十月二十日



ファールン ダーファー
法輪大法

功を修むるに路^{みち}有りて、心を徑^{みち}と為^なす
ダーファー
大法は無^な辺、苦を舟と做す

一九九二年七月二十四日

法輪大法

功修有路心為徑
大法無邊苦作舟

一九九二年七月二十四日



法に溶け込む

ぶつこう あまね
佛光は普く照らし

えんめい
礼儀は圓明となる

共に精進し

ぜんてい こうみょう
前程に光明たり

一九九二年十二月二十七日

容法

佛光普照

禮義圓明

共同精進

前程光明

一九九二年十二月二十七日



しょうぼう
正 法の船に乗る

しん げん
真か玄か修することや

こうこつ もうろう
恍惚たるか朦朧たるか悟ることや

一九九三年一月十七日

乗正法船

真乎玄乎修乎

惚兮恍兮悟兮

一九九三年一月十七日



無^む為^い

三教の修煉、無為^{こう}を講ず

正しき心であたらざれば、即ち有為^{うい}

専^{もつぱ}ら善事^{ぜんじ}を行うも、やはり是^これ有為

執着^さの心を去れば、真の無為なり

一九九三年一月十七日

無為

三教修煉講無為

用心不當即有為

專行善事還是為

執著心去真無為

一九九三年一月十七日



ダーファー
大法を学ぶ

根基を先天の条件と^なし

正悟^{しょうご}を上士^{けいいん}の慧因と為す

真善忍^{そん}を存すれば、心中^{しんちゅう}に道^{どう}有り

法^{ファールン}輪^{ダーファー}大法^{しゅう}を修すれば、圓滿^べす可し

一九九三年二月十八日

學大法

根基為先天之條件

正悟為上士之慧因

存真善忍心中有道

修法輪大法可圓滿

一九九三年二月十八日



えん めい
圓 明

心に真善忍を懷^{いだ}き

おのれ^{おのれ}己を修し、民^{たみ}に利^りす

ダーファー
大法、心を離れざれば

たねん^{たねん}他年に、超人たるは定^{さだ}まれり

一九九四年二月二十八日

圓 明

心懷真善忍

修己利與民

大法不離心

它年定超人

一九九四年二月二十八日



しょうぼう
正法の門を求む

機能は本より小術

ダーファーこそ
大法こそ是れ根本

一九九四年四月二日

求正法門

功能本小術

大法是根本

一九九四年四月二日



法を得る

^{ダーファー}
真に大法を修し

^{ただこ}
唯此れだけを大と^な為す

^{ダーファー}
大法に同化し

^{たねん}
他年必ずや^な成る

一九九四年七月七日

得法

真修大法

唯此為大

同化大法

它年必成

一九九四年七月七日



縁

だいかく　さら
大覚は心更に明らか

法を得て世間を行く

ゆうゆう
悠々たり数千年

いた　すで　な
縁は到りて法は已に成る

一九九四年八月二十七日

縁

大覺心更明

得法世間行

悠悠數千載

縁到法已成

一九九四年八月二十七日



りょうがん
了願

同じ心にて、世間に来る

法を得て、已に先に在り

他日、天を飛んで去る

自在にして、法は無辺

一九九四年八月二十七日

了願

同心來世間

得法已在先

它日飛天去

自在法無邊

一九九四年八月二十七日



じょ ほう
助 法

衆生を濟度せんと心願しんがんを發はつし

師に手伝てでんって世間よこを行く

吾われ法輪ファールンを轉てんずるに協力し

法な成なって天地てんちを行く

一九九四年八月二十八日

助 法

發心度衆生

助師世間行

協吾轉法輪

法成天地行

一九九四年八月二十八日



因果

修行の路は苦に非ず

生々世々の業力が阻む

思い切って業を消し、心性を修め

永遠の人身を得て、是れ佛祖

一九九四年九月十五日

因果

非是修行路上苦

生生世世業力阻

横心消業修心性

永得人身是佛祖

一九九四年九月十五日



迷いの中で修める

常人は知り難^{がた}し、修煉の苦

争いや闘いを福^なと做す

執著を一つも漏らすこと無く、修めれば

苦^さ去りて甘^{かん}来たる、是れ真^この福なり

一九九四年九月十五日

迷中修

常人難知修煉苦

争争鬥鬥當作福

修得執著無一漏

苦去甘來是真福

一九九四年九月十五日



着実に修める

法を学びて、法を得る

^ひ比して学び、^ひ比して修す

^{ことごと}事々対照し

^な做すところ^{いた}到るは^こ是れ修なり

一九九四年十月七日

實修

學法得法

比學比修

事事對照

做到是修

一九九四年十月七日



佛法は圓容

廣く^{ダーファー}大法を伝え

人を濟度して五行を出す

恒心^{こうしん}にして修煉し

圓滿し三界を超える

一九九四年十月十五日

佛法圓容

廣傳大法

度人出五行

恒心修煉

圓滿超三界

一九九四年十月十五日



再び済度

フアーレン
法輪は常に回転し、衆生を済度す

法を学び、法を得、心性を修め

末法の時、りん輪は再び回転す

縁有る士、しんぼう心法明らか

一九九四年十二月二十七日

再度

法輪常轉度眾生

學法得法修心性

末法之時輪再轉

有縁之士心法明

一九九四年十二月二十七日



しんしゅう
真 修

心に真善忍^あ在れば

ファールンダーファー
法 輪大法を成就す

常に心性を修めれば

圓滿^{みょう}して妙^{きわ}なること窮まり無し

一九九四年十二月二十七日

真 修

心存真善忍

法輪大法成

時時修心性

圓滿妙無窮

一九九四年十二月二十七日



同化して圓滿する

乾坤は^{ぼうぼう}茫茫とし

一輪の^{いちりん こんこう}金光あり

覺者世に^{くだ}下り

天地は^{どうこう}同向す

同化圓滿

乾坤茫茫

一輪金光

覺者下世

天地同向



宇宙は朗朗^{ろうろう}として
法の光に同化す
圓滿して飛昇し
共に天堂に回^{かえ}る

一九九四年十二月三十一日

宇宙朗朗
同化法光
圓滿飛升
同回天堂

一九九四年十二月三十一日



ダーファー
大法は迷いを破る

ゆうゆう ばんじ す えんうん
悠々たる万事は眼を過ぐ煙雲

常人の心を迷はせてしまう

ぼうぼう
茫々たる天地は何の為に生ず

衆生の智では答え難し

一九九五年一月二十七日

大法破迷

悠悠萬事過眼煙雲

迷住常人心

茫茫天地為何而生

難倒衆生智

一九九五年一月二十七日



三界を跳び出る

常人の苦樂を気にせざれば

すなわ
乃ち修煉者

世間の得失に執^{しゅう}せざれば

羅漢なり

一九九五年五月

跳出三界

不記常人苦樂

乃修煉者

不執於世間得失

羅漢也

一九九五年五月



けんくうじ おとず
懸空寺に訪れる

ひやくじょう さんがい
百丈の山崖、寺の中に懸る

ダーファー こうでん ひま かた
大法を洪伝して、間を得ること難し

こんじょう こがい
今生再び、古崖の寺に訪れ

他日法正されて、よろず
萬の寺に伝わる

一九九五年六月十一日

遊懸空寺

百丈山崖寺中懸

洪傳大法難得聞

今生重遊古崖寺

它日法正萬寺傳

一九九五年六月十一日



こうざん
恒山に訪れる

つね みね みち いずこ あ
山恒にして雲の嶺、道は何処に在る

こ かん ゆうゆう ゆうきやく
古観悠々として、遊客来る

げんちゆう みょう
常人は、玄中の妙を知らず

こびょう はつ
古廟を利用して、黒き財を發す

一九九五年六月十一日

遊 恒 山

山恒雲嶺道何在

古観悠悠遊客來

常人不知玄中妙

利用古廟發黒財

一九九五年六月十一日



わ 分かたれて明らか

佛来たりて、世中せちゆうを行き

常人は迷いて醒さめず

どくしゃ はなはだ
毒者は甚しく佛を害す

善悪は已に分かたれて明らか

一九九五年七月二十六日

分明

佛來世中行

常人迷不醒

毒者甚害佛

善惡已分明

一九九五年七月二十六日



なんかじ
南華寺に訪れる

佛門じょうちの浄地せいじょう、清静がたたり難し

魔道、邪心は乱世を行く

名勝めいしょうであればあるほど魔多し

人混雑して叫び売り、鞭炮ぼくちくが鳴る

一九九五年八月十五日

遊南華寺

佛門浄地難清静

魔道邪心亂世行

越是名勝魔越多

人雜叫賣鞭炮鳴

一九九五年八月十五日



自ら修める

ダーファー
大法、大いに発揚し

いくにん
幾人が得られるか

しげ じゅうじゅう
世間繁き事、重々

ひやくぼう ひま べ
百忙の間、自ら修す可し

えんうん
他日、煙雲が過ぎ去れば

どう
真の道を己に得たことを、初めて知る

一九九五年十月六日

自修

大法洪揚

幾人能得

世間繁事重重

百忙之間可自修

它日煙雲一過

方知真道已得

一九九五年十月六日



せい かん
静 観

せいしゅう ひま
静修の間に、神仙を見る

それぞ せんびやく
各れ神通を顕すこと、千百年

人心が魔と変わり、世は同じからず

しゅうしん ごう
衆神は済度しようとせず、劫の終わるを待

つ

一九九五年十月十六日

静 観

静修間來看神仙

各顯神通千百年

人心魔變世不同

衆神不度待劫完

一九九五年十月十六日



こう
洪

そうきゅう
蒼窮は無限に遠く

うつ がんぜん いた
念を移せば眼前に到る

乾坤は無限に大きく

ファールン まわ
法輪は天地に旋る

一九九五年十一月九日

洪

蒼穹無限遠

移念到眼前

乾坤無限大

法輪天地旋

一九九五年十一月九日



天地を主宰す

天の^{だい}大なること、天上に^あ天有り

同じく^{じつげつ}日月有りて、^{そうそう}層々として^{そうう}蒼宇に^み満つ

地の広きこと、天有りて地有り

共生する^{ばんぶつ}万物、^{げいげい}芸々として^{あまね}乾坤に遍す

一九九五年十一月十日

主掌天地

天之^{だい}大天上有^あ天

同有^{じつげつ}日月層層^{そうそう}滿^{そうう}蒼宇

地之^み廣有^み天有^み地

共生^{ばんぶつ}萬物芸芸^{げいげい}遍^{あまね}乾坤

一九九五年十一月十日



人と覚者の分別^{ぶんべつ}

人とは何か、情慾^{じょうよく}身に満^みつ

神とは何か、人心^{じんしん}存^{そん}する無し

佛とは何か、善徳^{ぜんとく}巨^{おお}きく在^あり

道とは何か、清静^{せいじょう}として真人^{しんじん}

一九九五年十一月十日

人覺之分

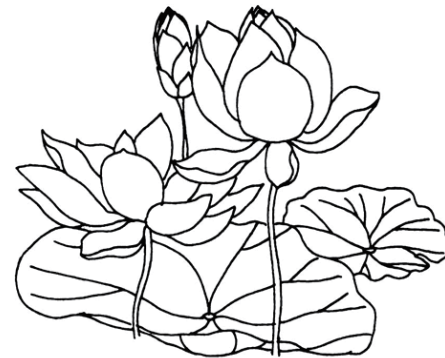
何為人 情慾満身

何為神 人心無存

何為佛 善徳巨在

何為道 清靜真人

一九九五年十一月十日



人と妖怪との間

狐、鼬、針鼠、蛇、世間を乱し

黒煙瘴氣立ちこみて、妖術を施す

師無く修せずに、大師を称し

癡々狂々として、二十年

一九九五年十一月十一日

人妖之間

狐黃白柳亂世間

烏煙瘴氣跳大仙

無師無修稱大師

癡癡狂狂二十年

一九九五年十一月十一日



高^{ところ}き処寒さに堪^たえず

人間の事に、氣遣^{きづか}い尽^つくし

天上の苦に、心を勞^{ろう}す

言^{げん}有りて、誰^{かた}に訴^{かた}るのか

更に寒しは、高^あき処に在^あり

一九九五年十一月十一日

高處不勝寒

操盡人間事

勞心天上苦

有言訴於誰

更寒在高處

一九九五年十一月十一日



大 覺

ばんばん 万般の苦を歴^{れき}尽くし

りょうきやく せんま 両脚は千魔を踏む

しょう 掌を立てれば、乾坤震^{ふる}い

空を横ぎりて立つ、巨^{おお}きな佛

一九九五年十一月十二日

大 覺

歴盡萬般苦

兩腳踏千魔

立掌乾坤震

橫空立巨佛

一九九五年十一月十二日



仕事と佛を修す

佛教、戒^{かい}を伝えること二千五百年
名利を先^まず去^さりて、再び苦を修す
今日^{こんにち}の和尚は、給料をもらい
出勤すに、また作業服有り

一九九五年十二月二十五日

打工與修佛

佛教傳戒二千五
名利先去再修苦
今日和尚發工資
上班還有工作服

一九九五年十二月二十五日



劫難の後

ぜつび ぜつこう たい
絶微にも絶洪にも、腐敗した物平らぎ

こうび じっぼう そうきゅう
洪微の十方より、蒼穹を見る

きよ す
天体は清く透きとおる、乾坤を正し

ごう
無限の劫已に過ぎ、宇宙明るし

一九九六年一月二日

劫後

絶微絶洪敗物平

洪微十方看蒼穹

天清體透乾坤正

兆劫已過宇宙明

一九九六年一月二日



迷い

げいげい 芸芸たる衆生、そうう み 蒼宇に満つ

そうそう 層層に全て、あ 天有りて地有り

みょう むきゆう 奇景妙なること無窮

せじん 世人は迷いて醒めず

迷

芸芸衆生満蒼宇

層層有天皆有地

奇景妙無窮

世人迷不醒



見んとするが、容易にあらず

修行は、^{はしご}梯を登るが如し

迷いを破るは、^{こうしょ}高處^あに在り

壯観にして妙なること、^{かた}訴^{がた}り難し

一九九六年一月三日

想見談何易

修行如蹬梯

破迷在高處

壯觀妙難訴

一九九六年一月三日



魔に変わる

天象大きく変り

世人は善念無し

人心の^{ひかえ}控るを失い、魔性顕れる

天災、^{じんか}人禍、^{うれ}憂い、^{うら}怨み

魔 變

天象大變

世人無善念

人心失控魔性顯

天災人禍憂怨



人々、敵の如く相見え

事々、全て意の如くなり難し

世人、その故をいかでか知らん

修道する者はその謎を知る可し

一九九六年一月四日

人人相見如敵

事事都難如意

世人怎知何故

修道者可知迷

一九九六年一月四日



どうちゅう
道 中

心^あ在らざれば
世と争うこと無し
視ても見ざれば
迷^{まど}わず惑^{まど}わず
聴いても聞かざれば
其の心^{がた}乱れ難し

道 中

心不在焉
與世無爭
視而不見
不迷不惑
聽而不聞
難亂其心



しょく^{あじ}
食しても味わわざれば

口その執着を断つ

な^い
做して求めざれば

常に道中に居る

静にして思わざれば

げんみょう^べ
玄妙を見る可し

一九九六年一月四日

食而不味

口断執著

做而不求

常居道中

静而不思

玄妙可見

一九九六年一月四日



威 徳

ダーファー^み
大法、身を離れずして

心に真善忍^{そん}、存す

世間の大羅漢

しんき^{おそ}
神鬼、十分懼れる

一九九六年一月六日

威 徳

大法不離身

心存真善忍

世間大羅漢

神鬼懼十分

一九九六年一月六日



ぶつ しゅ
佛 主

誰か天地の大なるを知る

銀河は脚下に在り

乾坤はどれほど遠し

転輪は手の中に持つ

一九九六年一月六日

佛 主

誰知天地大

銀河在脚下

乾坤有多遠

轉輪手中拿

一九九六年一月六日



ファールン
法輪世界

びみょう
美妙なること、

ご きわ がた
語を窮め尽くしても述べ難し

こうさいばんせん そうもく かがや
光彩万千、双目に耀く

法輪世界

美妙窮盡語難訴

光彩萬千耀雙目



ぶつこくせいち ふくじゆそろ
佛国聖地は福寿揃い

ファールン こうしょ あ
法輪世界は高処に在り

一九九六年一月二十三日

佛國聖地福壽全

法輪世界在高處

一九九六年一月二十三日



縁は^{せいか}聖果^きに帰す

師を探して、^{いくた}幾多^{とし}の年

ある日やっと、自ら^{まみゆ}見るを得る

法を得て、修して引き返り

圓滿し、師に^{したが}随^{かえ}いて還る

一九九六年一月二十三日

縁歸聖果

尋師幾多年

一朝親得見

得法往回修

圓滿隨師還

一九九六年一月二十三日



きょうどうさんじ
響堂山寺に訪れる

じつげつ かわ めぐ
日月は代るがわる転り

こ てんりん
乾坤は是れ転輪

ひ ま
指を弾く間に二百年

きょうどう ふる そん
響堂の旧きは存する無し

一九九六年三月六日

遊 響 堂 山 寺

日月輪流轉

乾坤是轉輪

拈指二百年

響堂舊無存

一九九六年三月六日



たいざん
泰山に登る

よじ^{のぼ}上る高き^{かい}階、千尺^{せんしゃく}の路^{みち}

うねりて^{けわ}険しきこと、歩^{あゆ}み難^{がた}し

振り返れば、正法^{しょうぼう}を修するが如^{ごと}し

天半^{なか}ばに停^とまれば、得度^{とくど}し難し

登泰山

攀上高階千尺路

盤回立陡難起步

回首如看修正法

停於半天難得度



こうしん
恒心をもって足を^あ挙ぐ、^{ばんぎん}万斤の^{もも}腿

苦を忍び、精進して執着^さを去る

ダーファー
大法の弟子、^{せんびやく}千百萬

功成って圓滿し、高き^{ところ}処^あに在り

一九九六年四月十五日

恒心舉足萬斤腿

忍苦精進去執著

大法弟子千百萬

功成圓滿在高處

一九九六年四月十五日



功成って圓滿

名利情を修し去り

圓滿して蒼穹そうきゆうに上るのぼ

慈悲をもって世界を見れば

ようやく迷いの中から醒める

一九九六年四月二十一日

圓滿功成

修去名利情

圓滿上蒼穹

慈悲看世界

方從迷中醒

一九九六年四月二十一日



太極

世を蓋う真人、張三豊

大道無敵、天地を行く

後世、名の為に拳法を乱し

吾太極を改め、吾名を壊す

一九九六年七月一日

太極

真人蓋世張三豊

大道無敵天地行

後世為名亂拳法

改吾太極壞吾名

一九九六年七月一日



苦 度

きなんきた ほうせん が
危難来れる前に、法船を駕す

かんけん はば
億万の艱險を、次から次へ攔む

しりはさい の
支離破碎した乾坤を載せ

いちむまんねん
一夢万年、ようやく岸の近くに着く

一九九六年九月二十三日

苦 度

危難來前駕法船

億萬艱險重重攔

支離破碎載乾坤

一夢萬年終靠岸

一九九六年九月二十三日



変異

陰陽は倒懸し

世人の心は変る

鬼獣は地に遍くして

人、道を離れること遠し

一九九六年九月二十六日

變異

陰陽倒懸

世人心變

鬼獸遍地

人離道遠

一九九六年九月二十六日



衆生を広く済度する

常人の心を^{ほうげ}放下して

法を得れば、即ち是れ神^こ

三界の外へ跳び出して

^{ぶっしん}佛身に乗って天に登る

一九九六年十月十六日

廣度衆生

放下常人心

得法即是神

跳出三界外

登天乘佛身

一九九六年十月十六日



しん めい 心 明

師と^な為りて法を広め、衆生を済度す

し か い きょう 四海は^{きょう}經を取りて、^{ほうせん のぼ}法船に^{のぼ}蹬る

じゅうあく どくせ 十惡の^{どくせ}毒世に、^{ダーファー}大法を伝え

ファーレン てんどう 法 輪を^{てんどう}転動し、乾坤正す

一九九六年十月十六日

アトランタにて

心 明

為師弘法度眾生

四海取經法船蹬

十惡毒世傳大法

轉動法輪乾坤正

一九九六年十月十六日

於亞特蘭大



難の中で乱れず

しょうぼう
正法の伝わるは

難しき上に難加わり

ばん ま さまた
万魔が攔ぎ

けわ けん
険しき中に険有り

一九九六年十二月二十二日

難中不亂

正法傳

難上加難

萬魔攔

險中有險

一九九六年十二月二十二日



末 法

世の人に^{じん}仁なく

神も神にあらず

人間に^{どう}道なく

正念は^{いずこ}何処に^あ存るか

一九九六年十二月二十二日

末 法

世人不仁

神也不神

人間無道

正念何存

一九九六年十二月二十二日



執着を放下する

世間の人はみな迷い

名^{みょう}と利に執着す

古人は誠^{せい}、而^{しか}も善

心静かにして福寿揃^{ふくじゅそろ}う

一九九六年十二月二十五日

放下執著

世間人都迷

執著名與利

古人誠而善

心靜福壽齊

一九九六年十二月二十五日



有為

びょう 廟を建てて神をおがむ事、しん 真に忙しきなり

有為は空なるを知らざり

ぐまい 愚昧に、せいてん 西天へのみち 道をもうそう 妄想し

手探りで夜を出歩き、月をすくあ 掬い上ぐことな

り

一九九七年三月二十八日

有為

建廟拜神事真忙

豈知有為空一場

愚迷妄想西天路

瞎摸夜走撈月亮

一九九七年三月二十八日



がくひびょう
岳飛廟に訪れる

悲壮なる歴史は、流水のように去り
浩氣忠魂、世間に留まる

遊岳飛廟

悲壯歴史流水去
浩氣忠魂留世間



千古の遺廟は、心を酸つ処

只丹心有りて、後人を照らす

一九九七年九月十一日 湯陰にて

千古遺廟酸心處

只有丹心照後人

一九九七年九月十一日 於湯陰



ふるさと
故里を訪れる

あきさめめんめん
秋雨綿綿として涙に似て

ていてい しんばい うが
涕涕として心肺を酸つ

きょうり こじん
郷里に故人無く

かそう いくど すた
家莊は幾度も廃る

訪故里

秋雨綿似淚

涕涕酸心肺

鄉裏無故人

家莊幾度廢



はっぴやくしゅう す
八百秋が過ぎさり

われ また
誰か吾、又何者を知るか

こうべ いくほん こう
頭を低くして幾本かの香をたき

煙は故人に向かって飛ぶ

み めぐ しんがんな
身を回らせて心願了う

きた
再び来りて衆生を済度して帰らんと

一九九七年九月十一日

岳飛の故里にて

來去八百秋

誰知吾又誰

低頭幾炷香

煙向故人飛

回身心願了

再來度眾歸

一九九七年九月十一日

於岳飛故里



とうりよう
清の東陵に訪れる

さいげつ すいりゅう
三百の歲月、水流に似て

きゅうでん こうか まんもく
旧殿、荒家に満目の秋

また きた
誰か知る今日又も世に来るを

ばんこ
他日法正して万古に留まる

一九九七年十月二十六日

こうきりょう
康熙陵にて

遊清東陵

三百歲月似水流

舊殿荒冢滿目秋

誰知今日又來世

它日法正萬古留

一九九七年十月二十六日

於康熙陵



善悪は已に明白

衆生は魔と変じ、災い窮り無し

ダーファー
大法は乱れた世で、救い済度す

正邪をわきまえず、天法を謗る

じゅうあく と しゅうふう
十悪の徒は秋風を待つ

一九九七年十一月十五日

善悪已明

眾生魔變災無窮

大法救度亂世中

正邪不分謗天法

十惡之徒等秋風

一九九七年十一月十五日



にちげつたん
日月潭に訪れる

いったんめいこ
一潭明湖の水

えんかいくすじ うつ
煙霞幾か輝きて映る

み あ
身は乱世の中に在りて

えがた
独自の美は得難し

一九九七年十一月十七日

遊日月潭

一潭明湖水

煙霞映幾輝

身在亂世中

難得獨自美

一九九七年十一月十七日



長安^{おも}を憶う

しんせん さんすい へん
秦川の山水は変じ

長安は土の下に^{そん}存す

せいよ てんちよう さ
盛世の天朝は去り

またた せんびやく
瞬く間に千百の春

いずこ たいそう たず
何処に太宗を尋ねん

ダーファー とうじん ど
大法は唐人を度せり

一九九七年十一月二十二日

憶長安

秦川山水變

長安土下存

盛世天朝去

轉眼千百春

何處尋太宗

大法度唐人

一九九七年十一月二十二日



安心

縁は已に結ばれ
法を修しており
多く本を読めば
圓滿近し

一九九八年一月二十七日

安心

縁已結
法在修
多看書
圓滿近

一九九八年一月二十七日



振り返る

ゆうゆう ばんこ
悠々たり万古の事

めい ぞうじゅ
迷の中の人を造就す

だ
誰か言う智慧大なりと

ま
情の中に乾坤を舞う

一九九八年二月十九日

回首

悠悠萬古事

造就迷中人

誰言智慧大

情中舞乾坤

一九九八年二月十九日



世界の十悪^{じゅうあく}

人に善念無く 人々敵と為す^な

伝統を破壊し 文化は頹廢^{たいはい}す

同性の欲に乱れ 心暗く魔と変る

賭^{かけ}も毒も盛ん^{さか}になり 心のままに振る舞う

性の乱れを開放し 邪惡へ向かわせる

世界十惡

人無善念 人人為敵

破壞傳統 文化頹廢

同性慾亂 心暗魔變

興賭興毒 隨心所欲

開放性亂 導向邪惡



やくざ、悪党^{あくとう} 政商^{せいしょう}は一家^{いっか}となる

自主^{じしゅ}の乱民^{らんみん} 天^{てん}に逆^{さか}らい道^{どう}に叛^{そむ}く

科学を迷信し 人類は変異す

暴力^{すうはい}を吹崇^{ゆう}し 勇^{きょうぼう}を好み兇暴^{きそ}を闘う

宗教^{よこしま}は邪^{へん}と変じ 銭客^{せんかく}、政客^{せいかく}なり

一九九八年七月七日

黑幫亂黨 政匪一家

自主亂民 逆天叛道

迷信科學 變異人類

吹崇暴力 好勇鬥狠

宗教邪變 錢客政客

一九九八年七月七日



がんもんかん
雁門関に訪れる

雁門関を踏めば

いんいん ひるがえ
隠隠として胸の内に翻る

千年の古き道在りて

かんちゅう こえん
関中に故煙なし

遊雁門關

踏上雁門關

隱隱胸内翻

千年古道在

關中無故煙



えんしょう
延昭、馬に乗りて去り

ゆ
風雲逝くこと一千

あ のぞ
目を挙げて関の下を望めば

ダーファー あ
大法は中原に在り

一九九八年八月十日 雁門関にて

延昭揮馬去

風雲逝一千

舉目望關下

大法在中原

一九九八年八月十日於雁門關



同化

經、其の心を修し
功、其の身を煉す
他日圓滿して
真善忍^{そん}存す

一九九二年十一月十八日
一九九八年八月 改訂

同化

經修其心
功煉其身
它日圓滿
真善忍存

一九九二年十一月十八日
一九九八年八月修改



しん せい
新 生

しょうぼう
正 法伝わりて

ばん まさまた
万魔攔ぐ

衆生を済度し

觀念転ず

腐敗物は滅され

こうみょう
光明が顕れる

一九九八年九月七日

新 生

正法傳

萬魔攔

度眾生

觀念轉

敗物滅

光明顯

一九九八年九月七日



笑う

私は笑う 衆生の覚悟を

私は笑う ダーファー 大法が伝わり始めるを

私は笑う とせん 渡船の出航を

私は笑う 衆生の^{ゆうぼう}有望なるを

一九九八年十一月十六日

笑

我笑 衆生覺悟

我笑 大法開傳

我笑 渡船起航

我笑 衆生有望

一九九八年十一月十六日



